

右手にカツ 左手ゴハン 戦斧開始！

ペッピンごはん

かつとじを汁一滴までぶっかけ豪快に？いやセバレーのまま上品に？ツヤツヤ、ふくら色白ごはんは、美味しいお米の代名詞・福井産コシヒカリ100%



ピュッフェ漬物

みんな大好きキュウリの漬物。シャリシャリ噛んで箸休め、味のアクセントにどうぞ。テーブル上の小さな覗きから、お好きな分だけご自由に。こんな気配りも◎

かつとじ丼
550円(税込)



宇治市小倉町春日森10
TEL.0774・24・0977
営業時間 11:00～翌2:00
(L.O.翌1:30) 無休



ジュジュッと、かつ

揚げたて、サクサク夢ゴコチ…。乾パン粉＆生パン粉、2層のコロモで肉汁ガード。ふんわりタマゴで優しくとした、ジューシーかつに我を忘れる事必至

ハーモニカ奏者

和谷 泰扶

Watani Yasuo

KYOTIAN I.D.

キヨーティアンアイディ

'60年生まれ。6才からハーモニカを学ぶ。'83年日本ハーモニカ賞を受賞し、ハーモニカ発祥の町にあるホーナー・コンセルヴァトリウム音楽院の招待留学生として渡独。'88年、同校のハーモニカ専任講師に

【ハーモニカとは…】和谷さんが使用する、オーケストラとも共演する楽器として位置づけられるハーモニカはクロマチック・ハーモニカと呼ばれるもの。一般に馴染みのあるハーモニカとは構造が異なり3オクターブの音域を出すことができる

ノスタルジイに止まらない 音色響かせるハーモニカ



400～500席のホールであれば、マイク無しでも充分ハーモニカの音を響かせることができるという



サイドのレバーを使用することで3オクターブの音域を出すことができ、そこからフルートに近い音色が生み出される



Information

京都フィルハーモニー室内合奏団第120回定期公演
世界的ハーモニカ奏者 和谷泰扶さんを迎えて
日時：2001年5月27日（日）14:00開演
場所：京都コンサートホール（小ホール）
入場料：大人3000円（大学生以上）、
小人1800円（4才以上）※全席指定、当日各500円up
●問い合わせ先
京都フィルハーモニー室内合奏団 075-212-8275
<http://member.nifty.ne.jp/kyophil/>

「現在日本の小学校では、音楽の授業でハーモニカは使われていないんです。縦笛よりも音色に暖かみがあって、耳を鍛えるのにもいい楽器なのに…」それまでハーモニカのことを話すのが楽しくて仕方がない、という様子だった和谷さんのトーンが急に落ちる。「教えられる先生がいないんです。それはドイツでも同じ。だから僕は学校の先生を集めて教えはじめた」という。その試みは、ドイツにて徐々にではあるが定着しつつあり、「やっぱり日本人ですから、近い将来は日本でも教えていきたいなあと思ってます」と語る。

6才で、兄に倣ってハーモニカ教室に通い始める。以来、ハーモニカの音と楽しさに研鑽を積み、同志社大学4年の時にはF.I.H.JAPANのハーモニカコンテスト・クロマチック部門で優勝する。この優勝が、老舗・和ろうそく屋の跡を継ごうと考えていた和谷さんの人生をひっくり返す。ハーモニカ発祥の地、ドイツ・トロッキンゲンの市立音楽院の招待留学生として招かれたのである。世界で唯一のハーモニカ科。が、「最初はドイツ語もまったくわからへんし、質問に対して手探りで解答してましたね」。質問が理解できないゆえ、ああやってみると、こうやってみると試行錯誤の繰り返しだった。けれど「その経験で、ひとつ言わされたことに対するいろんな答えがある、ということを学びましたね。それが教える立場に立った今、すごく役に立っていると感じる」。言葉の壁、ハーモニカの街と言えども楽器としての認識の低さ。それらをバネに和谷さんは「国際ハーモニカ・コンクール」「ワールド・ハーモニカ・チャンピオンシップス」など次々と優勝の実績を勝ち取り、その実績をもって母校での教鞭を執る。「ドイツという国は保守的な部分があって、ハーモニカはクラシック楽器としてはまだ受け入れられづらい。楽器として見なされるために、いい演奏・いい指導者・いい楽器が揃うこと必要」との思いが冒頭の「先生達に教える」に繋がる。

「ハーモニカは他の楽器に比べて、携帯もしやすいし、どこでだって吹くことができる。そのハーモニカを吹くことで僕への評価がコロッと変わったりするのを見ると、「僕を表現してくれているものはこれだ」と思うんですね。こんなに素晴らしい楽器・ハーモニカの一面を知って欲しい」と演奏会も世界各地で精力的に行う。「やっぱり本物に触れて欲しいから」のひとに、ハーモニカへの思いがこぼれんばかりに詰まっている。その思いが、ハーモニカを生活の中の身近な存在へと招いてくれる。そう遠くはない将来、京都にてそんな活動が生まれることが待ち遠しい。